【第155号　二〇一七年十一月　五日発行】

福音の園だより

平成18年度「高年齢者雇用優良事業所　協会会長賞」受賞
平成27年度「介護職員確保・定着のみの優れた取組」表彰

グループホーム・デイサービス介護保険事業者指定
350-0016 埼玉県川越市木野目一八七八番地一
特定非営利活動法人 **福音の園・埼玉　事務局**
☎049-230-1111(FAX230-1112)

ご家族の声（お便り）

【あの日】

朝早く携帯が鳴る。「お母さんが……」姉が叫ぶ。予期はしていた。随分前からこうなることを知っていた。一ヶ月ほど前のクリスマス会では、笑ったり歌ったりとしっかり反応していた。しかし、すぐ疲れてしまうらしく自室に戻ると、ベッドに入り目を閉じてしまった。僕たち兄妹は久しぶりの再会に、ベッドを囲んで、楽しく 時には騒々しく談笑した。

一時間ほどでホームに到着。部屋に飛び込むと、安らかな眠るような表情で横たわっている母がいた。そこに“死に顔”はなかった。声を掛けるとスーッと目を開きそうだ。「まだ温かいですよ」と当直の職員の方に促されて布団の中に手を入れた。ついさっきまで生きていた証がそこにあった。ここまでの経緯を説明されて出ていかれた。母と二人になった。

「私は誰でしょう?」。母との面会はこの言葉で始まるのが常だった。母は一瞬戸惑った顔して、「ノブちゃんでしょ」と小さな声で。僕は大きな声で「ノブちゃんは誰ですか?」とたたみかける。母は質問に答える小学生のように真剣な顔で「私の息子です」と。僕は嬉しくて飛び上がりそうな気分になる。母はニコッと笑う。この言葉を聞くために僕は母に会いに来ていた。

しばらくして姉たちが駆け付けてきた。僕は少し離れたところで「日常生活記録」を手に取る。

２２：４０　良眠されている。ときどき咳き込まれる。吸い飲みでポカリを勧めるが拒否。
２３：４０　…　０：１５　…
１：４５　…　２：１５　…
４：３０　トイレ、尿(±)、パッド(－)。更衣介助後 休まれる。
６：３０　朝食なので、起床の声がけに訪室する。反応なく、血圧も測れない。すぐにA番で来る社員に連絡する。
６：４０　星原DRのケイタイに電話する。
６：５０　長女K氏に電話する。

ペラペラとページをめくる。今まで何気なく見ていたこのノートの中に、母の命の証があった。母はしっかり支えられ、見守られていた。

あれから二ヶ月余りの時が流れた。東京は桜が満開。気温もずっと上がって、すぐそこに春がやって来ている。

N・N

注　本年1月、９５歳で死去(老衰)されたN様ご家族から寄せられたお便りです。当園デイサービスご利用後そのまま入居され6年余を共に生活された。告別式で出棺直前、霊柩車から降りて歩み寄られ固く握手下さった。**僕は嬉しくて飛び上がりそうな気分になる。母はニコッと笑う。この言葉を聞くために僕は母に会いに来ていた**」―「あの日」の握手はこのお言葉の中に込められていました[ホーム長 杉澤卓巳]。

理念・方針説明

当たり前な「名前を呼ぶ介護！」

グループホーム **福音の園・川越** ホーム長 杉澤 卓巳

本誌「第１３１号」で『**一人ひとりに名前があることを忘れないで**』と題して、讀賣新聞朝刊「人生案内」を引用しながら 当園「理念・方針」を説明しました。

５年も前のこと。大型施設の認知症棟入所中の８６歳母を訪問した折、「トイレへ！」と訴えた。介護現場で働く妻なのでトイレ介助は苦ではなかったが、久し振りで本人身体状況を十分把握していない中で下手に介助してケガをさせてはいけないと施設職員さんを呼んだ。母の真横に停めた車椅子へ移乗介助中、椅子「肘掛けに当て、手の甲 皮膚を裂傷」させてしまった。

ところが、その後の対応にビックリ仰天。すぐに看護師が呼ばれ処置された。何人もの職員が母を囲んでいながら、「痛かったでしょう、ゴメンナサイ!」も、「杉澤さん」と母の名前を呼ぶ言葉も無かった。それだけでなく、そばに立つ私共家族へ「お母様に痛い思いをさせてしまい申し訳ありませんでした」の言葉も無かった。「施設に老親を託す家族」をこの日実体験した。

「**業務上の介護**」と「**愛の介護**」の違いを本誌「第９０号」で解説しました。「**愛の**」と記すも特段際立った介護と云うのではない。至極当然な「**一人ひとりに名前があること**」、「**名前を胸に刻むこと**」、「**名前を呼ぶこと**」であり、「名前と一体」な「**尊厳を呼び覚ますこと**」。「**名前を呼ぶ介護**」に徹しながら、当たり前のことを当たり前にお世話させていただく時、仰々しくない 等身大の「**愛の介護**」が実現していくのです。

来訪歓迎　**視察**・シャロームグループホーム様(坂戸市)

御礼　**慰問**　木野目すみれ会様(川越市)